

日本印刷学会 2015 年度プリプレス研究会研究例会

今さら聞けない、プリプレスの基礎知識と課題

～基本理論、トラブルの対処法、そして最新の情報まで～

主催：(一社) 日本印刷学会 技術委員会 プリプレス研究会

日時：2015 年 11 月 27 日 (金) 9:55～17:15 (受付開始：9:30)

会場：日本印刷会館

〒104-0041 東京都中央区新富 1-16-8

プログラム

9:55～10:00

開会あいさつ

プリプレス研究会主査

10:00～11:00

1. 知るとスッキリ！ 文字の話

井上 芽久美 (株)モリサワ)

私たちの日常生活には、フォントを使用しているものが実にたくさんある。印刷・出版の分野だけに限らず、私たちが目にするさまざまな媒体で文字が登場し、そこには「フォント」というものが欠かせない存在になっている。

フォントを使用する一番の目的は、見る人に情報を伝えることである。しかし役割はそれだけではない。情報を相手の心にどのように伝えるかという点でも重要な役割を担っている。情報のニュアンスを伝えたり、受け手に感情やイメージを想起させたり、そのデザインによって、情報をより相手の心に印象付けることができるのである。

そんなフォントの重要性とは裏腹に、日本は欧米に比べてフォントやタイポグラフィに関する認識が浅いと言われている。デザイナーなど専門職の人間であっても、理にかなったフォント選びができる人間は少ないと言われている。

本講演ではまずフォントに関するさまざまな基礎知識を紹介し、それをベースにフォントを分析・識別する方法を考える。さらに、フォントに関するトラブルの事例や、近年注目されている UD 書体などのトピックについても説明する。

11:00～12:00

2. RIP って何？ RIP の仕組みと網点概論

佐々浦 映展 (株)メディアテクノロジー ジャパン)

印刷物作成において CTP 出力は当たり前となり、RIP 処理は欠かせない工程となっている。デジタル印刷においても RIP 処理は必須の工程である。RIP は、出力処理だけでなく面付け・版設計やカラーマネジメントも担って来ており、印刷物を製作する上で製版工程をソフトウェア化した重要な役割を担っている。今や当たり前となっている RIP 処理であるが、多くの人に

取ってはブラックボックス化し内部でどういう処理をしているかはあまり認知されていない。その一方で、RIP 処理は文字化け・データ化けといった印刷トラブルの一因にもなっている。データ化けの要因は RIP ソフトに起因するだけでなく、RIP 運用に起因することも多い。RIP の仕組みを知ることでデータ化けの要因に関する理解が深まり、印刷トラブルの抑制につながる。また、網点生成も RIP の役割であるが網点は印刷物の品質に大きく影響する事項であり、RIP による網点生成における各種事項(網種・網線数・網角度等)の理解も重要である。本講演では、ブラックボックス的に使用している RIP の仕組み・機能と網点概要の説明を行い、印刷トラブル抑制の一助となるよう、必要となる基本的な知識を紹介する。

<昼 食>

13:00~14:00

3. 印刷版から見た印刷 ～知って得するオフセット技術と版～

海老塚 健史(富士フイルムグローバルグラフィックシステムズ(株))

印刷物を印刷するにあたり、デジタル印刷機を除き概ね全ての印刷機はその印刷物に相応する印刷版を必要とする。また、印刷媒体、印刷資材、印刷機など様々な要素が絡みあい出来あがる成果物である印刷物は、それぞれの変動要素を最小限に抑え且つ、それぞれの性能を最大限に引き出すことが、よりよい印刷物を作るための一つの手段となる。加えて現在では、よりよい品質を達成しつつ、消費・発生する資源を抑え、利益を確保することのバランスを上手くとることが重要となる。

本講演では、様々な印刷方式に応じた印刷版の特徴について簡単に紹介すると共に、オフセット印刷における印刷版(CTP版)の変動を抑え、性能を最大限に発揮するために必要な基礎知識とトラブル対応を紹介する。また、刷版性能を最大限に発揮することで得られる、品質・またそれ以外の恩恵及び、プリプレス部門で行える省資源への取り組みについて、あわせてご紹介する。

14:00~15:00

4. カラーマネジメントの基礎 ～色を評価する～

宇野則彦 ((同)カラードック)

印刷物を製作する工程では、色についてのトラブルの発生が多い。その多くは、企業内や企業間の担当者間で、観察条件や人に起因する色の見え方、基準に対する考え方、プルーフの品質・性能などに関して認識の違いがあり、そのために生ずるコミュニケーション不足が原因と思われる。

こうしたトラブルを防ぎ、効率よくより高品質な印刷物を製作するためには、カラーマネジメントについてのより深い知識を習得して、自社で運用し、十分なコミュニケーションを計るのが望ましい。

しかしながら、そうした運用を難しくしているのは、カラーマネジメントの内容が多岐にわたり、複雑で、深く理解するのに時間がかかり、習得するためのハードルが高いためと思われる。

本講演では、担当者が自社でカラーマネジメントを実践し、円滑なカラーコミュニケーションを行う一助となるように、カラーマネジメントの考え方から ICC プロファイル、カラープルーフ、色基準、色評価などについて、必要な基本的な知識を基礎から紹介する。

<休憩>

15:15～16:15

5. デジタル印刷の基礎と今後の動向

宮本泰夫 (㈱バリューマシーンインターナショナル)

デジタル印刷技術の普及が始まり 20 年余りが経過した。ダイレクトメールやチラシなど、我々に身近な印刷物の中にも、デジタル印刷技術により作成された印刷物が増えてきており、当初予測されたよりペースは遅いものの、着実にデジタル印刷技術の市場は拡大している。デジタル印刷技術は現在、乾式(粉体)、湿式(液体)のトナー技術とインクジェット技術の 2 つの印刷方式が代表的な技術として利用されている。それぞれに得意な点や苦手な点などの特徴があり、求められる品質や生産性、印刷される材料などに応じて使い分けがなされている。また、これらに続く技術として、2012 年に発表された Landa Nanography の実用化にも期待が集まっている。

本講演では、まずデジタル印刷方式の基礎的な技術を解説し、その性能面や進展の方向についての理解を深める。さらに、それぞれの印刷技術の特徴、用途などを整理、分類することで、今後の市場拡大など、期待される市場動向について解説する。

16:15～17:15

6. クロスメディアの最新動向と印刷会社のこれから

山下潤一郎 (ブライター・レイター)

日本アドタイザーズ協会 Web 広告研究会によれば、クロスメディアとは「それぞれのメディアの特性を活かしながら、相互補完的に情報を提供すること。ユーザーをいかに『動かすか』に重点を置く」と定義される。これに対して、「複数のメディアで個別に展開して、リーチやフリークエンシーを最大化すること。ユーザーに『多くの情報を届ける』ことに重点を置く」ものは、メディアミックスと定義される。

クロスメディアは必ずしも新しい考え方ではない。マーケティングでは以前から、ATL(Above the Line)・BTL(Below the Line)と呼ばれるメディアを組み合わせた取り組みは存在している。しかし、Web の利用が広まり、コミュニケーションにおいて双方向性やタイムリーさが重要さを増す中、マーケティング領域でクロスメディアの果たす役割・責任も大きくなっている。

こうした展開は、コミュニケーション分野に強みを持つ印刷業界にとって大きなチャンスである。ジョー・ウェブ博士、リチャード・ロマノ氏の著書「未来を創る」(JAGAT)によれば、「『メディア』は変化していない。変化しているのは、そのコンテンツの届けられ方」なのである。つまり、コンテンツの作られ方や届けられ方、それらの効果・効率を測定・評価・改善する方法などに注目すれば、印刷業界の V 字回復の道は見えてくる。

本講演では、クロスメディアを理解する上で基本となる考え方やキーワードをご紹介します。あわせて、海外のものも含めたクロスメディアの最新事例や、印刷会社がクロスメディアの取り組みを通じてV字回復するヒントも紹介する。

定員:70名(定員になり次第締切)

参加費:会員・協賛会員9,000円, 非会員12,000円 参加費は当日会場受付でお支払ください。

申込方法:日本印刷学会のホームページのフォームからの参加登録をお願いします。本シンポジウムを選択してお申し込みください。E-mailまたはファックスでも結構です(氏名, 所属, 連絡先, 会員の有無を記入ください)。

連絡先:(一社)日本印刷学会 事務局

〒104-0041 6-8 日本印刷会館内

電話:03-3551-1808 FAX:03-3552-7206 E-mail:nijspst-h@jspst.org

お断り:事情によりプログラムまたは講師を変更する場合があります。